

本の紹介

団結よひろがれ

—にこよん詩集の人々—

「団結よひろがれ」は、全日自労飯田橋分會が三〇周年をおかえ、その記念行事として、

これまで二十二号が発行されてゐる「にこよん詩集」をまとめて發刊したものだ。

全日自労、飯田橋分會、にこよん詩集の詳しい説明が編者の江口英一氏のはしがきに書かれてゐる。

「全日自労」とは、知らない人もいふと思ふので、ておくのだが、日本が敗戦後、失業者と貧困者を埋まつた昭和二十四年、それを緩和するため緊急失業対策法が制定された。それによつて急ぐしうえに創設された失対事業制度に、集まつてきて働く失業者、老若男女の人々がふくみ上つた。彼等は日々やとりの形式で簡単な公共土木事業に働き、この失対事業日雇労働者によつて達成された最大の

組合が全日本自由労働組合（全日自労）といふのである。

その制度はわたしは、ひとりでいえば半ば治安維持対策的に国がつくり出したと思ふのだが、もちろんそこには、生きるための細い綱を見出し得なかつた人々には、必死の思いであつた。一日一日が文字通り、「生きる」ことの「闘い」そのものであつた。彼等のもとの日その日の区役所から貰う賃金（出面）で、ざら・とりつた一は、二百四十円ばかりであつた。これを「にこよん」とよんだのは、何処からきた言葉であらうか。そしてその言葉が、より悪りは別として、彼等を表現する言葉となつてしまつたのだ。

飯田橋の公共職業安定所の労働部（失対をとりあつかう）には、昭和二十五年八月には、一〇〇〇名の日雇登録者が登録され、記録されてゐる。この頃、戦前から建設産業関係に占めて由緒ある組織であつた「東京土建」は、いち早くこれらの人々の組織に着手し、約五〇〇名くらゐの組合員を、飯田橋職安前につくり出し、「東京土建一般労働組合飯田橋職安分會」と稱したが、例の「メーデー事件」（昭和二十七年五月）は、これに大きな打撃を与え、實質的に組織そのものの解体に追いこんだのであつた。

ところが労働者の方もさるものだと思われ。ちぢまると同時に、労働「現場」に根をつくる。正確にはこれが先述の「職場委員會

の卵であった。『職場委員会』とは、その頃では、昭和二四、五年を契機に、『食』と『職』と、さらに『住』と、さらに『家』をも戦争で失った人々が、烏合の大群衆として、公共職業安定所の窓口を殺到したのが、いち早く、ささやかな『職場』をつくり、いろいろの経緯はあるが自分達の『自主的会合』のちの全体の『自主的組織』の中の『職場委員会』の卵のようなものを区役所の『現場』につくっていったことを示している。労働者といふものは早わざをやるものであり、すばしこいものだからと、『頭の廻転』(後出)に感心する。『飯田橋管内では、四六土ホとリッて、先の歌にもあったように、『文京』とか『本郷』とか『牛込』とか『四谷』とか、そこに『自主的』労働者の組織をつくり出していった。そればかりではなかった。そして直ちにこれらを飯田橋管内全体で統合すべく、早くも翌二八年三月には、『飯田橋統一準備会』が発足されるのである。

だから、二十八年五月に刊行された『全日本自由労働組合』の創刊第一号の発行者名は『飯田橋自由労働準備会文化部』となつてゐる。そしてその年の十二月には四六土ホの統一が実現され、『二二二』に『飯田橋自由労働組合』が名実共に結成された。そのときの組合は、セ。名と記録されてゐる。生活を守り、また失われた守るべき生活そのものをつくり出すために、自分の力で自主的につくつ

た組合である。

一方、『職場』に足をおき、同時に飯田橋職安管内の統一をはかり、大きく『團結』するといふことは、心を二つの方向にそれぞれ向けていかねばならず、ある意味で大へんむづかしいことであつたであらう。その大同団結のための大きなそして『具體的』な役割りを果たしたものが、『二二二』に『二よん詩集』といふことになるのである。お互の信頼を、結びつきをさらに強化したのが、『二二二』に『二よん詩集』であつた。『二二二』に『二よん詩集』は単なる文学作品を集めた『詩集』ではなく、労働者同志の『團結』と『信頼』への血が、通つてゐるものといわねばならない。

『飯田橋自由労働組合』は、翌一九五〇(昭和二九)年一月には『メーデー事件』後、全都の日雇労働者運動を再建し再出発するため『全都的規模で形成された』『全都日雇統一会議』に、参加することになる。そしてその年三月には、『飯田橋自由労働統一』は、臨時大会を持つてゐる。

すなわちそれまで『全日本自由労働組合』(東京土建)の更に上部の組織は、その『職人部』(建設関係の職人を中心とする)と『職安部』(前記失対労働者を中心とする)『職安部』との分離が早くから問題になつてゐたが、一九五二年(昭和二七)年『京都大会』で『職安部』の分離独立が實質的実現し、翌一九五三年(昭和二八)年『東京都渋谷大会』では、正式に

『全日本自由労働組合』と呼称することとなり、『二二二』に名実共に失対日雇労働者を中心とする全国労働組合が形成されるようになったのである。(詳しくは、『全日本自由労働の歴史』全日本労働編・労働旬報社一九七七・八刊を見よ)『飯田橋自由労働組合』は、それに合流・加盟し(昭和二九年九月)、『全日本自由労働組合東京支部飯田橋分会』という名前になり、『二二二』のようにして、仕事なく食もなく住むところにも事欠く人々が、いわば自生的に発生したともいえる。いわば『飯田橋困民党』ともいふべき飯田橋管内の失業者が、昭和二九年には早くも全国組織をもち、全国的視野と仲間をもつことになるのである。

歴史の紹介が長くなりました。いよいよ中

身の紹介です。

なさせない うちのろっばく

俺はニコヨン しかたない草
道路なおしを せりながら
捨つたあつめた かなものを
売つたお金で 洋服買った
あ、なさせない こんなこと

朝、昼、晩の三食を
質素なもので済ませては

セッセと金を貯めました
おかげでタンマリ貯つたが
比頂ちよりちより目が廻る
あ、なさせない こんなこと

ニコヨンについでーその悲劇性ー 海野達任

私は『二二二』と『二二二』に就いて、近頃、考え始めてきた。

それといふのも『二二二』の子。だといつて、自分の子供がバカにされた親のことだの『二二二』と『二二二』と『二二二』と、近所の人達に笑われたことを、苦にして、自殺して果てた、私たちの仲間のことを思つ時、やはり、私は『二二二』と『二二二』という仇名に就いて、考えずにはいられなくなつてきたのである。

この邦に、敗戦後できた、新語『二二二』は、その語源とするところをたどれば、テキ屋のフチヨウで、二百四十円との意味だとうである。したがって、その語源の生れでたところには、感心できかねる所似も、この辺の処にあるのである。

『二二二』の頃、ヘンに『二等兵』といふ言葉が、流行し始めてゐる。『二等兵』とは、軍隊で一番下の階級のことである。

それと比較される言葉が『二二二』である。それは、日本のどんな生活者を指し、また、自由労働者を意味し、世の最下級者を型ちどる、仇名といえることは、『二二二』の紙上で、

とやかく説明するより、事實である。

軍隊のない日本では「二等兵」とは流行語であらうが、「にこよん」は、断じて、流行語とは考えられない。

「にこよん」は、「にこよん」とは、そこに、社会的な悲劇性がふくまれてゐる。それ故に、流行語ではない。流行とは消えて行くものだが、日本に、自由労働者（日雇）がなかならなげり、どん底生活者がいる限りでは「にこよん」といふ名は、最下階級者のな悲劇性と共に、消えることはないであらう。

日本での「天皇」といふ名は「にこよん」の正に「天皇」といふ名は「にこよん」といふ名と、共ども、生きながらえるであらう。それが日本の性格である。現代日本の悲劇的な二つの性格を物語る処である。惑る人は「にこよん」とは愛称だといふが、人をバカにするのもほどがあると考ええる。

かきわていふが「にこよん」とは日雇のこよんなのだ。そういふ意味のふくまれた「にこよん」といふ名は愛称だといふより、な考え方をする人々にあえてこの一文をかいたのだいなのだ。

地下足袋

児五 祐吉

三人の盲人が、象の型をいろいろと主張してケンカをする寓話がある。
二の話はおそらく、一つの物でも全体も知

一つものに対して、全く人さままである。

如く僕は、地下足袋を足にはく、物としてみてゐる。即、履物としての機能性の問題で大いに感心させられてゐる。

誰でも自分の考えを持たない者はなり、とよく云はれるが、僕は、どうも、そうではなからうと思ふ。

借りものの知識で、さも自分の考えだと錯覚してゐる場合は案外に多いのではなからうか？

現に、天皇に対する考え方を例にとつても同じ僕なのに、戦前と戦後では、すっかり変つてしまつてゐる。

教育の重大さを考えさせられる。本当らしく繰り返して教えられると、終には、それが本當のことだと信じてしまふ、すると、実際は正しき事実が、ウソのこととしか受取られなくなる。

まゝ、事実と反することであつても、学校で教はつたり、ラヂオや、新聞や、政府がウソを云う様なことがある筈がなりといふ思想は、白度の戦争を通じてもあれ程、ダマサレ続けた経験をもち乍ら、尚、未だに根強く残つてゐる。

らぬが本當のことは分らなりのだ、といふことと、人はたりがり片寄つた知識で、ゆがんだ姿しか見てゐないものだと、いふことを教へてゐる訓話であらう。

さて、僕が土方で飯を食うようになった、はじめに地下足袋をはきだした時の気持を今でも覚えてゐる。

下駄、草履、靴、生れてから随分いろいろな種類や型の履物を経験して来たが、足の肌にはピッタリして、抵抗を感じない、何処を歩こうが汚れることが気にもかゝらない、これほど素直な、ストリートにながめる履物にはじめて出会つた。

僕は履物について、ことさらに研究もしたことはないけれども、おそろく、他国ではこれ程機能的な履物はなげりだつたと思像する。庶民性が二ジミでた日本の生活の知慧の香を感ずるのである。

コリゼのメカニズムが格別イカセル。はき心地を考へて、かきむも、が内外二列につけてある親切が、なにげなく殊更に喜しい。僕は、こんな庶民の作品を身につけると、スツト立ち上つて、サア働こうといふ気になつた。

僕は、地下足袋が好きなのである。
而し、人によつては、地下足袋を履く身に落ちたかこ、思はず涙が、こぼれたといふ。

「頭で仕事をする人は偉い人で、頭のなり奴が肉体労働をする」といふ間違った考え方が、実際には、イト平然と至極あたり前のこととして通用してゐる。

社長、課長、職員、常用工、臨時、日雇。仕事の手配は、なるほどこの様に伝えられるが、それだからと云つて、社長は頭で、労働者は手足で、臨時、日雇は爪のアカ。人を使うのは偉い人で、使はれる方は能のない奴、といふ評価は當つてゐるだらうか。

「人を借り身になつてみた」と云う人が多あるのは、斯んな評価が案外沢山の人の中に残存してゐることを示してゐるものと云へよう。南国軍隊では、地主の伴は将校に、自作の伴は下士官に、小作の伴は兵卒に、といひり不文律があつた。

戦後は大いに民主化が叫ばれ、人は皆平等となつた、たとへば伝してゐるが実際どうだらうか、やはり金と時間を持つてゐない者には、大学も、音楽会も、お芝居も、バカンスとやらも、一切縁がない。

所詮は、人を使つてピンはぬした者が、金と時間と文化とを独占してゐるのである。而し、何時の時代でも、文化を作りだしてゐる者は誰か、生産を直接司る働く者である。ギリシヤ文化は奴隷が作ったのだし、封建文化は百姓だし、今日の文化は労働者が作つた。

てける。その生産物を我手に握って、文化の
恩恵に浴してけるのが、貴族、殿様、資本家
とその家来たちという次第で、彼らが決して
作つたものではない。

その時の文化を作つてける者こそが本当は
値打があるんじゃないだろうか。

一体、偉いとか劣るとかいうことと少しも
関係がない様に思えるのだが、
皆さんそうは思いませんか。

僕は、何かに、気のつかない様な変な、
歯車がカマされていて、元の動作が逆転して
伝へられる様に僕たちの思想も、媒体物をう
カツに信用すると気の付かない中に真実を逆
転して信じこんでしまふ。

物は物としてみなくてはならぬ。
履物は履き勝手の点で評価すべきである。
人は生産への貢献で考えられるべきである。

支配構造の不合理的は社会問題として解決し
よう。

そして、
地下足袋は履き物として、機能の上か
ら「優」の評点をやらうではありませんか。

その他、詩、俳句、東京・ばるん舎
左となど、盛岡、ちくさん、
一、二〇〇円

毎週水曜日

水曜日

詩をつくらう
日野善太郎参加

水曜日

版画をつくらう

水曜日

川柳をつくらう

創造広場

